

平成30年6月3日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770260

研究課題名(和文)近代ドイツにおける食肉観の科学化 動物・食品・獣医

研究課題名(英文)The Scientization of Meat: Animals, Food, and Veterinarians in Modern Germany

研究代表者

光田 達矢(MITSUDA, Tatsuya)

慶應義塾大学・経済学部(日吉)・講師

研究者番号：90549841

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「科学」が「食」に介入するようになった歴史的現象を、ドイツにおける獣医学の台頭と食肉検査体制の成立を関連付けながら明らかにしたものである。19世紀半ばまでの検査は、医学の監視のもと肉屋が行うのが慣例となっており、消費者が自ら食中毒から身を守ることが期待されていた。実施する自治体の間にも温度差があり、規則も全国的に統一されていなかった。ところが、人獣共通感染症を危惧するようになると、状況は一変する。獣医学者が専門家集団として影響力を持つようになると、肉屋・人医・消費者を排除することで、公共と場を中心とする検査体制が1880年代に全国的に確立し、その後、世界に輸出されていった。

研究成果の概要(英文)：The research was designed to contribute knowledge about the impact of science on the consumption of food, focusing in particular on the role of veterinary medicine in the assessment of meat in nineteenth-century Germany. Before the establishment of a modern and obligatory system of meat inspection during the twentieth century, European states, including German ones, relied on the expertise of butchers, medical practitioners and consumers to protect against meat products. Building on recent international research on the intertwined histories of animal health and food, the investigation was able to show how and why veterinarians came to contest the expertise of all three to construct, by the 1880s, a system of meat inspection in which veterinarians became the principle scientific experts working in newly-built abattoirs. As a model country whose example was emulated across the world, results revealed why butchers, doctors and consumers today have very little to do with meat inspection.

研究分野：西洋史

キーワード：食 動物 ドイツ 食肉検査 感染症 獣医学

### 1. 研究開始当初の背景

従来の歴史学ではあまり注目されてこなかった「食」と「動物」というテーマが、近年欧米を中心に、盛んに研究されるようになってきていることが、本研究のそもそもの出発点である。このテーマが政治や経済から文化、人間心理にいたるまであらゆるものと結びついており、その結びつきのあり方を明らかにすることによって、対象とする時代や社会の本質を明らかにすることが期待できると考え、本研究を始めた。

食の社会文化史(以下、食の歴史)と動物の社会文化史(以下、動物の歴史)の問題は、これまで研究がそれぞれ独自に進められてきた点にある。しかし、と畜の発展史研究を見ても明らかのように、動物を食肉から切り離すことは、歴史的に長年密接につながっていた要素を切り離すことを意味する。

その結果、「食肉」といった両分野にまたがるテーマでは、食の歴史では動物の視点が、動物の歴史では食の視点が欠落することになった。そこで、本研究は、動物の歴史と食の歴史の統合を果たすべく、動物が食品に変身する過程そのものに焦点を当て、動物が消えていくことと食肉が普及する歴史的過程に着目することで、食と動物の関係性を総合的にとらえ直すことを目指した。

### 2. 研究の目的

本研究では、食と動物の近代的関係性に迫るため、科学が果たした役割は小さくなったと考え、ドイツにおける獣医学の台頭に対象を絞り調査・分析を進めることにした。

言うまでもなく、食用に供される豚、牛、鶏をはじめとする家畜の肉を、健康上、食べても大丈夫なのかという判断が誰かによって下されなくてはならない。19世紀を通してこの判断を下す役割を獣医師が徐々に担うようになって行った。つまり、動物が食品と化して行くプロセスにおいて、獣医師が行う「検査」が重要になって行ったのである。

この点、どういった知識に基づき獣医師が検査の必要性を訴えたのか、誰を説得しどのような体制を構築して行ったのかを問題とした。このように、食と動物の関係性に介入した獣医師の活動を分析することで、本研究は、19世紀を通して、ドイツ社会の食肉観の変化、食肉の科学的理解の浸透、食肉が生産される場所と方法について明らかにしようとした。

### 3. 研究の方法

本研究は、対象時期を3つ(1780-1830, 1830-1880, 1880-1930)に区切り、以下の3つの観点から、豊富な一次資料の発掘と分析を進めた。

a) 心性【社会文化的側面】:日記、料理本、食中毒関連資料を手掛かりに、社会階層の相違に留意しつつ、ドイツ社会の食肉観を浮き彫りにしようとした。

b) 知識【科学的・獣医学的側面】:専門書、指南書、業務記録、専門雑誌を手がかりに、食肉の科学的理解の浸透具合を見極めようとした。

c) 制度【政治経済的側面】:農林省、衛生局、獣医学委員会、肉検査、公営屠畜場関連資料を手がかりに、動物が食に変身する場所と方法を解明しようとした。

上記の通り、それぞれの時期のなかでそれぞれの要素(心性・知識・制度)の相互関係を検討しながら、食肉の獣医療化(“Veterinization”)によってドイツ社会の食肉観が、動物的理解から科学的理解へと移行して行った過程・原因・効果を明らかにしようとした。

### 4. 研究成果

19世紀半ばまでの食肉検査は、医学の監視のもと肉屋が自ら行うのが慣例となっていた。さらに、消費者が自ら食中毒から身を守ることが期待されていた。このことからわかる通り、国家が国民の食生活に介入することはそもそも求められておらず、食中毒事件が発生したところで、行政の責任を問う声は皆無に等しかった。また、既得権益を護りたい肉屋も国家介入を嫌い、家畜を市場に送り込む農業関係者も、検査に否定的な態度を示していた。そのため食肉検査を実施する自治体はあったが、都市部と農村部との間で大きな温度差があり、その結果、規則を全国的に強化・統一するような動きに発展しにくかった。

ところが、1860年代ごろになると、状況は一変する。人獣共通感染症を危惧するようになったからである。とりわけ大きな契機となったのが、豚肉を媒介する寄生虫によって引き起こされるせん毛虫症であった。生豚肉を口にする食習慣のあった北ドイツを中心に猛威を振るい、多くの死者を生み出した。当初は、人医が治療にあたり、病原体を究明したのち、市民に対する啓もう運動に乗り出した。各家庭における顕微鏡を用いた自己検査を呼びかけ、生豚肉を食べることを控え、調理する際に高熱処理を施すよう予防を徹底しようと試みた。従来の検査習慣を尊重し、消費者を教育することに主眼が置かれたことが見て取れる。

このような状況下で、獣医も声を上げるようになっていった。それまでは、牛疫をはじめとする動物間感染症に専ら従事し、人獣共通感染症に目を向けることが少なかった。また、家畜伝染病防疫体制においては科学者として地位がより高い人医に後塵を拝していた。しかし1860年代に突入すると、医学と同じようなステータスの獲得を目指し、ヒトと動物をまたぐような領域にも進

出するようになる。人医が進めてきた啓もう活動に疑念を呈し、せん毛虫症の流行が止まらないことを理由に、消費者による自己検査を否定する立場をとった。その際、獣医師の管理のもと公共と場における食肉検査体制の構築を訴え、肉屋・人医・消費者をその体制から排除することで、獣医による食肉検査の独占を実現しようとした。やがて国家も追随し、1900年に、食肉検査を全国的に義務化する法律に漕ぎつけた。

このような結果となった要因として、人口増加に伴う食糧問題が無視できない。当時の栄養学は肉食を絶対視していたこともあり、社会の肉食化を推奨していた。ところが、感染症などの流行のせいで、食肉を満足に供給できずにいた。安価な輸入肉に頼らずには、中流階層以下の胃袋を満たす状況にはいかなかった。そこで、獣医は、と場に動物を集めることで、病気にかかった動物であっても、問題のない部位を正確に峻別することで、より多くの肉を国民に提供できる知識があると訴え、食肉検査の主導権を握るに至ったのである。

同じように見逃せないのは、政治と農業の動きである。当時、経済自由主義を掲げていたイギリスが、ヨーロッパ大陸において発生した牛疫の流入を防ぐため、1860年代に、外国産家畜の輸入を制限する保護政策に走った。これに危機感を覚えたドイツの農業団体は、家畜の輸出への影響を打破するため、それまで懐疑的な態度しかとっていなかった肉検査を受け入れるようになる。ロシアから流入する家畜伝染病の脅威に加え、安価な食肉による競争にも対抗できる措置として検査を支持した。かくして、獣医を中心とする、公共と場における近代食肉検査体制が確立され、後に、世界中にそのノウハウが輸出されていった。

上記の研究成果を、海外を中心に発表を展開してきた。国際的な学術誌に3本の論文が掲載または出版が決定しており、国際学会において本研究に関連するテーマについて口頭発表を7回実施した。その結果、世界的にも盛んに行われている、食の歴史と動物の歴史といった両分野に貢献できたように思う。

本研究は、19世紀ドイツを出発点としながらも、研究活動は、近年、20世紀の東アジアにも目を向けるようになっており、よりグローバルに研究が進みつつある。今後の研究に大きな可能性が残されている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Tatsuya Mitsuda, 'Trichinosis Revisited: Science, Self-Protection and Abattoirs in

Germany, 1860-1880', *Food and Foodways* 27/1-2 (2019). 査読あり・掲載決定

Tatsuya Mitsuda, 'Veterinary Identities in Late Imperial Germany', *Veterinary History* 19/1 (2017), 66-86. 査読あり

Tatsuya Mitsuda, 'Entangled Histories: German Veterinary Medicine, c.1770-1900', *Medical History* 61/1 (2017), 25-47. 査読あり

(学会発表)(計7件)

Tatsuya Mitsuda, 'Mapping New Technologies of Slaughter: the 'Model' Abattoir in Tsingtao under German, Japanese, and Chinese Rule', *Closing the Gap: How Technology Changes Spatial Relationships Between Humans and Animals*, Nordic Centre, Fudan University, Shanghai, March 30 2018.

Tatsuya Mitsuda, 'Bovine Imperialism: Japanese Livestock, the Threat of Animal Diseases, and the Supply of 'Safe' Meat and Cattle in East Asia, c. 1890-1940', *Animal Agriculture from the Middle East to Asia*, Harvard University Law School, May 12 2017.

Tatsuya Mitsuda, 'Animal Health, Veterinary Knowledge and Japanese Imperial Opportunities c. 1890-1930', *The Eighth Meeting of the Asian Society for the History of Medicine*, Academia Sinica, Taiwan, 1 October, 2016

Tatsuya Mitsuda, 'Conceptualizations of Meat, Undercooked Pork, and Public Education in Germany, 1860-1880', *Trusting the hand that feeds you. Understanding the historical evolution of trust in food*, Brussels, 8 September 2015.

Tatsuya Mitsuda, 'Constructing Japanese Veterinary Knowledge: Fears of Rinderpest, Imperial Opportunities and the Korean Frontline, c.1890-1940', *Animal Histories in Human Health: Comparative Perspectives from East Asia*, Hong Kong University, Hong Kong, March 26 2015.

Tatsuya Mitsuda, 'Meat and Veterinarians in Imperial Germany', *World Association of the History of Veterinary Medicine*, Imperial College, London, 12 September 2014.

Tatsuya Mitsuda, 'Unfit for Human Consumption? Animals, Meat and Veterinarians in Late imperial Germany', *Bi-annual Conference, Society for the Social History of Medicine*, Oxford, 11 July 2014.

(図書)(計0件)

(産業財産権)

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
取得年月日:  
国内外の別:

(その他)  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

光田 達矢 (MITSUDA, Tatsuya)  
慶應義塾大学・経済学部(日吉)・専任講師  
研究者番号: 90549841

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号:

##### (4) 研究協力者

( )